dolphin
5つ星のうち5.0 日本の近現代が立体的に見えてくる

2022年9月28日に日本でレビュー済み
「満州の元馬賊王の話をすると、なぜ、今、馬賊なの？　と決まって問い返される」――著者はあとがきでこう吐露している。評者も本書に初めて接したとき、著者にそんな問いかけをしたかった。だが、読み始めると、次第に引きこまれていく。

本書の主人公は小日向白朗。1900年、新潟県三条市の小さな商家に生まれた次男坊が、「狭い日本にゃ住み飽いた　海の彼方にゃ支那がある」とばかり、17歳で単身満州に渡る。のちに馬賊王と呼ばれるようになり、日中、および中国国内の争闘で暗躍。
南京軍事法廷にかけられながらも辛うじて生き延びた戦後は、それまでの人脈・交遊を生かして、ニクソンと毛沢東の接近、さらに日中国交正常化など、国際政治の大きな岐路で、重要な役割を舞台裏から果たした。

著者は、白朗が歴史の中で演じた役回りと限界を冷静に、ときには厳しく追っている。同時にその生涯に、「夢とロマンへの郷愁」をそそられた心情も告白する。

白朗が接したり、周辺にいた人物として、さまざまな大物政治家、政商、宗教家らが登場する。出口王仁三郎、川島芳子、孫文、張学良、蒋介石、朱徳、野坂参三、東条英機、岸信介、児玉誉士夫、笹川良一、田中清玄、文鮮明（統一教会）、辻政信、毛沢東、周恩来、鄧小平、ニクソン、キッシンジャー、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、上野英信……。
「アウトロー」として生きた白朗を歴史の裏側に「鏡」として置いて、これら多彩な人物の姿が映し出されることで、著者がいうように、近現代の日本（と周辺）の光景が立体的に見えてくる。

今日、日本を取り巻く東アジアの安全保障環境は厳しさを増す。「米国、中国の動向を侮らず、また侮られず。アジアにもっと目を開け」という白朗が残した言葉で、本書は結ばれている。